「石井式をベースに言葉と音感の教育で内面が豊かに」

いずみ幼稚園（足立区）
園長　小泉敏男氏

いずみ幼稚園では、石井式漢字教育を実践してすでに二十年近くになりますが、その導入のきっかけとなったのは、知人の紹介で出席した石井式の勉強会で、石井先生ご自身から言われた「君たちは、今、子どもたちを十分に満足させるだけの仕事をしているという自信があるか」というひと言でした。

当時、私の園ではちょうど三歳児のクラスを新設したばかりで、従来の二年保育の内容をゆっくりと噛み砕いて行っていて目標設定が低かったこともあり、一年がかりで、どうにか“整列”や“前へならえ”ができるようになるといった有り様でした。

従来の幼児教育に疑問を感じ「子どもを預かるからには、きちんと目に見える成果がなければ、教育とは言えないのではないか」と思い、何か幼児に適した教育法がないものかと模索していた時期だっただけに、石井先生の言葉は痛烈でした。

さらに先生は「もし実践して私の言うことに嘘がある、間違いがあることが判明したなら、あなた方に 100 万円ずつ差し上げよう」ともおっしゃいました。そこには小学校や幼児教育の現場での実践や、知的障害児ですらこの教育法で本が読めるようになるという実績に裏付けされた、ご自分の教育法に対する確固たる自信が感じられ、この言葉がかえって鮮列な印象で、すごく感激したことを今でも覚えています。

実際には、石井式の導入を決めてからも職員や保護者からは「幼児に漢字など必要ない」といった声が少なからずありました。そこで「何かマイナスがあるようなら、すぐにやめるから、とにかくはじめてみよう」と半ば強引にスタートさせたのです。

すると、まず職員は、子どもたちが漢字で書いた自分の名前をすぐに覚えてしまうのを見て「これはすごい」と、子どもの能力の素晴らしさに驚きました。保護者も、実際にわが子がどんどん漢字を読めるようになる姿を見ると、やはり嬉しいものですから、むしろ以前より、わが子の教育に関心が高まってきました。

私白身が実感する漢字教育のいちばんの効果というのは、やはり集中力と理解力がまったく違ってくるということです。

漢字教育を実践すると、三歳児でも、わずかひと月でしっかりと整列できるようになりましたし、運動会などの行事の練習も、先生の話がきちんと聞けて理解も速いので、以前の半分も時間がかからず消化してしまいます。そのことを「よくできたね」と評価してあげると、それが嬉しくて、今度は新しい課題にみんなで挑戦しようとする意欲とか楽しみも自然にまして、さらに子どもが生きいさとしてくるのです。

また、私の園では、石井式と同様に幼児期の適時教育として「ミュージック・ステップ」という幼児のための音感教育にも力を入れていま

す。この創始者であり作曲家の譜久里勝秀氏が考えられた教育法は、石井式と類似性が多く見られ、特にカリキュラムの導入部では、漢字を利用しての手法がうまく生かされています。

園児たちの名前は全て漢字で

たとえば、三歳児のいちばん最初の課題では、まず、元気よく返事をすることの大切さをテーマにしたお話を、キーワードを漢字カードで示しながら子どもたちに聞かせます。すると、子どもたちは、ただ耳で聞く以上に集中し、お話の世界に入りこむことができます。

そこで、次に「正しくお返事」という歌をみんなで歌います。「お返事ハイッ、正しくハイッ」という短い歌詞ですが、お話の内容がそのまま表現されているので、子どもたちは、生きいきとしたイメージを感じながら歌います。さらに、今度は歌詞の「ハイッ」の部分で、みんなで一緒に手を叩くことを覚えます。

こうして、子どもたちは楽しみながら、自然な形で音楽に触れ、一音節のリズム打ちという第一の課題をマスターしていきます。このようなリズムや並行して体験するリトミックでの音との出合い、そうした小さな積み重ねを続けるうちに、すべての子どもたちが、園での三年間で絶対音感を身につけることができるようになるのです。

ミュージック・ステップのもう一つの大きな特徴は「子どもが自ら感じる力」をたいへん重視しているところです。たとえば、音楽に合わせて体で表現をするリトミックは、多くの幼児教育の現場で取り入れられていますが、そのほとんどは、先生が「はい、今度は、ライオンさんになってみましょう」などと、先回りして指示を出すものです。しかし、ミュージック・ステップでは、あくまでも子ども白身が音楽の変化を自分の耳で感じて判断して表現するように配慮されています。

こうしたことは、音に集中し、音感を研ぎ澄ますのに大切な要素であるというだけではありません。何でもまわりから言われなければできない受け身の態度ではなく、自分で考え、判断し、行動できる子どもに育てていくうえでも、大きな意味をもっているのです。

幼児教育の中には、幼児の IQ を上げることだけを目的に、早いうちから左脳を鍛えるトレーニングばかりを行うものも少なくありません。しかし、そういう子どもが小学校の高学年頃になって伸び悩んだり、感性が極端に欠落していたり、という例を私は多く見ています。

その点、石井式も、ミュージック・ステップも、小学校教育の先取り教育ではないので即効性はうすいが、人間のいちばん大事な基礎の

部分をしっかりと育てる、というところでは共通していると思います。つまり、幼児の脳の配線をどんどんつなげていくばかりではなく、脳全体のキャパシティーを広げていくような教育なのです。

現在、小学校の教育現場では学級崩壊など、さまざまな問題が表面化しており、それに伴って、幼児教育のあり方が改めて問い直されております。

そんな時代だからこそ、漢字を覚えたり、音を感じるといった、幼児期なら誰もがもっている高い能力を生かしつつ、子どもの内面を豊かに成長させていく、石井式やミュージック・ステップのような教育が、ますます重要になってくるのではないかと思っています。